2010年度4月度の総括

すべての「進学塾ビッグバン」に集う人々へ

人は、人生を始めてから、徐々に芸術を始める。私の場合は逆で、芸術を始めてから人生を始めたような気がしている。

フランスの19世紀の有名な批評家サント・ブーヴの『わが毒』という随想集の中に、私は最近恐ろしい文句を発見した。それは次のようである。

「齢(よわい)不惑を越えた高名な多くの人々の間に、失敗や脱線や狂気のさたや卑劣な行為を見るにつけ、ぼくは思う。向こうみずや気の早さはあるが、青春というものはやはりまじめな聡明なものだ。方向を失って軽薄なものになってしまうのは、かえって人生の後半においてだ」と。

最近このくらい私にショックを与えた文章はない。

長幼の序とは一体何であろうか。サント・ブーヴの言うところによると、このまじめで聡明な青春が、方向を失って軽薄なものになってしまった年長者を尊敬するということであろうか。世代の断層ということが言われ、昔のような師弟の間柄や、先輩後輩のうるわしい敬愛の念がほとんど見捨てられている今日では、青春と中年、あるいは老年との対話は、いつも激しいギャップなしにはかわされない。

人生は、成熟ないし発展ということが何ら約束されていないところにおそろしさがある。我々は、いかに教養を積み知識を積んでも、それによって人生に安定や安心が得られるとは限らない。長幼の序とは、私には、あまり年齢の差のない間で効果のあることばのように思われる。運動部のわずか一年二年先輩後輩の間でも、秩序正しく守られている礼儀作法は、見るも気持ちのよいものである。

しかし現代社会では、スポーツ部のそのような長幼の序はともすると一つのフィクションのように見えるのである。昔のように、スポーツ部の長幼の序のきびしさの外側に、社会全般に老人を敬う風習があり、その先輩後輩の長い長い階段によって築かれた社会の一つの小さな反映が運動部なのであった。しかし今では、老人はただ尊敬されることではなしに、若い相手をおだて上げて、うまく押え込み、うまく支配する方法を覚えてしまった。その技術を察知した後輩、すなわち青年たちも、長幼の序の立て方を、単に世間的な利害や、自分の功利的な、出世主義的な考えの一つの人生技術としてしか学ばないようになった。もっとも、こんなことは今に限ったことではなく、戦前から実際はそうであった。

軍隊のことを無階級社会のお手本というと不思議なようだが、戦前の日本は華族以下平民の末にいたる階級社会で、軍隊だけがその独自な閉鎖社会の中のきびしい階層を以て、世間の階級を無にした別世界を作っていたのだった。今の日本は、日本中が無階級社会になったから、却って年齢差がただ一つの階層になり、戦後たちまち老人社会が出来上がってしまったものと思われる。

軍隊では、いじめられる初年兵は、いつか自分が上官になって初年兵をいじめることを夢見てがまんした。先輩を今のうちに立てておかなければ、自分が先輩になったときに権威を振り回すことができなかったからである。しかし一方でその年齢の秩序そのものが、さっき言ったように、社会の変化で頼りにくくなっているときには、長幼の序はおろか、われわれは、全学連が主張しているような各人の完全な自由のほかには何ものもない世界に住むことになるかもしれない。しかし、私は確信を持って言えるが、どんな自由な世界がきても、たちまち人はそれに飽きて、階段をこしらえ自分が先に登り、人をあとから登らせ、自分の目に映る景色が、下から登ってくる人の見る景色よりも、いくらかでも広いことを証明したくなるに違いない。要はその階段が広いか狭いか、横になって一列に登れるか、あるいは縦に一列でしか登れないかの問題である。長幼の序とはその狭い階段のモラルであるが、われわれがその階段をいかに広くしても、階段をほしいという人々の欲求をなくすまでには至らぬであろう。長幼の序が重んじられなくなると、逆転して、人々は「若さ」をもっとも尊敬しなければならなくなるに違いない。

―――三島由紀夫「若きサムライのために」昭和 44 年（1969 年）1 月刊――

周知のように、三島由紀夫は、翌昭和 45 年、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地に、自ら創設し育てた私軍「楯の会」のメンバーとともに乱入し、総監を人質にとってバルコニーから自衛隊員にクーデターを呼び掛ける演説をし、受け入れられないと見るや、割腹自殺を遂げました。　おりしも、全学連、全共闘全盛時代で、新宿騒乱事件、東大安田講堂決戦など、左翼学生があたかも街頭と学園を制圧しているかのような時代でした。

三島由紀夫割腹事件は、左翼、右翼両極の学生、労働者に深甚の影響を与えました。高校生だった私は、戦後最高の作品と言われる「金閣寺」も「仮面の告白」も、「憂国」も読んでおらず、作家三島由紀夫も、三島の人となりも何も理解していませんでした。

その後、彼の作品に耽溺するようになり、彼が予告した、日本の「行く末の不安」が的中し始めるのを実感するようになりました。

この「若きサムライのために」は、三島が、高校生レベルにも分かりやすく説いたエッセイです。

若者は「完全な自由」を求めるが、やがてそれに飽き始め、新しい階級制度などの「束縛」を求めるようになる、それがつまるところ、長幼の序という普遍的な「束縛」などへとつながっていく、という趣旨です。

三島由紀夫が自決した翌年あたりから、左翼運動は、あさま山荘事件、連合赤軍事件、連続企業爆破事件、そして中核派 vs 革マル派、革労協 vs 革マル派の内ゲバ事件などというかたちで凄惨な殺しあいの袋小路へと向かって行きました。殺し合いの組織の多くは、「自由」とは裏腹に、鉄の規律、「束縛」を旨とし、それを破ったものを「反革命」と規定し粛清するといった、国家規模でいえば、スターリンや毛沢東、近々では金正日のやり口そのものを地で行く方途を選んだのでした。

日本にとって、こうした 70 年代が幸いだったのは、まだ、中国や韓国が十分に国力をつけておらず、日本はひたすら日本の内部を固めることに腐心することができたことでしょう。国内の疲弊に乗じて日本を侵犯する勢いがかの国どもにあったならば、日本はどうなっていたかわかりません。70 年代に青春期を送り、強い日本やアメリカの国家権力を疎ましく思い、それを否定媒介とすることで精神形成をおこなっていた私たちも、決して安閑と「反戦・平和」の歌を歌っていることなどできなかったことでしょう。

時代は 21 世紀になり、私たちの子どもが受験期を迎えるようになりました。そして、中国や韓国が、みるみる国力を増強してきました。北朝鮮も貧者の武器「核」を保有するようになりました。「非核 3 原則」などというものを後生大事に守ってきた日本の周りには、ならず者たちが虎視眈々と日本の「弱み」に照準を合わせています。日本人が「差別反対」に弱いと見るや、「差別反対」を叫び、「核」や「過去の過ち」に弱いと見るや、ことさら「核」や「過去の過ち」を突いてくる、領土を侵犯してくる、人の国の教科書にも口出しをする、いわば国家の物心両面の侵犯を平気で繰り返してきています。私たちが青春を送った 70 年代の牧歌的な「日本は悪いことをしたのだから謝罪と償いをしよう」とか「アジアの人たちと連帯して平和な世界を築こう」とかいったスローガンが、今は通用しないどころか、付け込まれる原因にさえなっています。

同じ年代の人たちと話をしていると、結婚していないか、結婚していても子どもがいないという人は、いまだに 70 年代の反国家的、やや左翼的考えのまま中高年を迎えている人が多いですが、私のように、受験期の子どもを抱えている親御さんたちは、押し並べて、わが子が今後生きていく日本の行く末を案じ、どちらかというと、右翼的、利権的、国家主義的に「転向」しています。そして後者の多くは、わが子に「自由闊達な」浪人生活より、「束縛」を旨とする、徹底した勉強を強いる体制を好まれます。

ビッグバンが今年から始めた朝食義務付け、管理栄養士による夕食提供システムは、多くの親御様から絶大なる支持をいただいております。

一方、生徒からは、「まあまあ」という意見です。「味は今一つ」と言いながら、「でも 500 円だぜ」と言うと「ならいいか。」という返事です。彼らの言葉の中には、親に申し訳ないほど金銭的に迷惑をかけている、それに対してはどんな「不自由」も「束縛」も甘んじて受けなければならない、という意味が隠されています。最近、子どもに反抗期がなくなったと言われていますが、それは、国家とか、親といったかつて絶大な権力を誇っていた存在が、裸の王様のように、わかりやすい、物分かりの良い、一生懸命だけれど、どちらかと言えば弱い存在になった、と子どもの目に映っているであろうことと決して無縁ではないと思います。

親も、日本も弱くなった、と思い、敬老精神と愛国心が、きわめて切実でいとおしいも

のとなって来るのを覚えます。かつて「親孝行」だの、「愛国心」だのというと、体制的だの、右翼的だのと決めつけて唾棄していたものですが、いまはそうではない、けれどそれは、決して健康な姿ではなく、親や、日本が、いま本当に先行きの見えない、不透明で不安な舵取りを強いられている姿の表れなのです。

私は、4 月 11 日の開講ガイダンスで、「民主党政権は、医師不足を理由に、外国、特に中国や韓国から出来合いの医師を招いて補おうとしている。彼らに永住権を与え、日本国内において無期限で自由な診療活動を許そうとしている。君らの今から懸命に勉強して獲得しようとしている医師の道、いわば聖域が、外国人医師によっていとも簡単に荒されようとしているのだ。すでに歯科医師の世界は、わが国における外国人歯科医の無期限の診療を許している。すでに歯科医が余っている、というのにだ。これに対しては、君らのお父さん、お母さんとともに、私は闘っていかねばならない。君たちの利権のために、エゴのために闘う。いいか。早く医師になれよ。いつまでも浪人するな。」と檄を飛ばしました。私は予備校講師ですから、予備校講師らしく、このあたり「いいか、犬を食うような民族に負けるな。」と叫び、笑いをとりました。生徒にも、私たちの思いが伝わったと思います。

今年は、医歯薬ロジスティックス（浪人生）コースは、昨年の合格実績 64%を上回る実績を出したい、できたら 100%と行きたい、と願っています。それには、一人一人に合った勉強法を確立してあげることから始める必要があります。私自身は、毎週の英語添削を通じて生徒一人一人の学習達成度は無論のこと、記述問題の添削ですから、「文は人なり」の原則にならい、体調や精神状態まで把握していこうと思っています。

さらに、今年の「講師所感」は「理解度」と「習熟度」を盛り込むことにしました。前者は、文字通りその授業の理解度を示しますが、後者は、これまでの授業を通じた定着度や応用力を示すもので、厳しめに評価されます。つまり、夜時限や自宅で、復習や定着作業を怠っていては「習熟度」には高い評価が与えられない仕組みになっています。

理科科目の「チェック＆リピート」は、今年から増えた７限目理科の「復習・定着」授業と連動して、主に国公立大学医学部や大阪医科大学、東京の私立旧設医科大で頻出の記述問題への対処をはかっていきます。７限目授業は、質問、添削、プレゼンなどを織り込み、４月にしてすでに、ときどき笑い声の出る、活気溢れるものになっています。

月曜日夜時限２限目を「センター・私大医学部英語」とし、上位２番手レベル女子高のセンター英語の平均点を２００点満点中１６８点、リスニング平均点を５０点満点中４３点にまで押し上げた S 先生を起用しました。先生の授業では、センター試験におけるリスニングのネイティブと同じ発音とスピードで、１学期中は主に文法・語法を中心に授業をされます。夏ごろからは、shadowing という手法で、日本語を母国語とする生徒たちに対してのリスニングの訓練をお願いしています。授業を受けた生徒に聞くと、「とにかく速い、ついて行くのがしんどい」とぼやく生徒が多いですが、櫻井先生には今のスピードを落と

さないで行ってください、とお願いしています。若い生徒にとってスピードというのは、半年も経てば必ず慣れるものであり、また慣れなくてはなりません。ビッグバンは、あちこちに乱立している家庭教師センターや、個別指導専門予備校ではないのですから、生徒の愚かさにいつまでも迎合し、それを利用していつまでも授業料を取ろうとする所と同じであってはいけないとの強い姿勢を示す意味もあります。音を上げるなら辞めてもいいよ、どうせ無料なんだから、しかし、来年のセンター試験の英語は保証しないよ、という姿勢です。

今年からは、プロの先生も、個別指導に積極的に参加していただくようになりました。個別指導専門予備校の「プロ講師」が往々にして、大手予備校で使い物にならなくなった講師のなれの果てであることと対照的に、わがビッグバンのプロ講師は大手予備校で名を馳せ、今も引っ張りだこの先生方ばかりです。それだけに、その先生方がビッグバン生に個別指導をしていただくことの意味と、先生方の心意気を知っていただきとう存じます。

4 月中は、寝坊などによる遅刻の数は延べ 3 件でした。延べ、という部分、一人で複数回寝坊した者がいたことを示します。遅刻をした子には、昼休みにわざわざ面談室に呼んで、お説教をしました。いきなり私がするのはどうかと思ったのですが、ともかく、1 分の遅刻も許さない、朝ご飯を食べないのは許さない、という方針、姿勢は伝わったかと思います。昨年、比較的管理の緩い予備校にいたり、受験をなめていたりした子には、結構ショックだったと思います。この 3 件という数字、例年と比べ、滑り出しとしては、まあまあです。

5 月は、9 日と 23 日に模擬試験、16 日に保護者会と日曜日が潰れることが多いです。

しっかり体調を管理し、単調な日々に耐えしのんでください。成績はおのずと向上していきます。

今年からは、「親にこれ以上迷惑をかけるんじゃないぞ」という文言とともに、「今の君の姿勢では、アメリカはおろか、中国、韓国に負けてしまうぞ」という文言を織り込んで、右翼的に（？）指導していこうと思います。

平成 22 年 4 月末日　　進学塾ビッグバン　松原好之（文責）